

[論文]

北條民雄の日記などからその生死観その他をうかがう

成田 稔

はじめに

北條民雄（以下、北條）の第一区府県立全生病院（以下、全生病院）での入院病歴には、軽症癲腫型、しばしば癲性結節性紅斑（俗に熱こぶ）を発症し、発熱、神経痛強度、肺結核及び腸結核を合併、咳嗽少、腹痛、腹部不快感、下痢頻発、羸瘦著明とある。癲と宣告（告知）されて自死を意企しないものはいないというが、さらに加えて重篤な合併症を病む苦痛は、「死んだほうがまし」といった思いに駆られて当然だろうし、それも隔離されている、つまりは、ここでこのまま死ねとばかりに見殺しにされているようなものとなると、その不安と苦悩は私たちの想像を超える。

どこまでどうであったのかわからないが、北條と親友東條耿一とは、互いに日記を見せ合っていたというから、忿懣、満足、悲哀、欲求などといった心中を、相手によりよく伝えたいために、そこを客観視している面も多いのではないか。また日記全体からすると、「死ぬ」か「生きる」かの相克であっても、終わりには「死んで絶対的自由を得る」よりも、「生きて個我の守りに徹した創作」を目指しているように読める⁽¹⁾。

こうした北條の死生観の流れの中から、その人となり、交友などについて少しうかがってみたい。

「今」が死ぬ時ではない

北條の『いのちの初夜』の主人公尾田は、癲の宣告を受けて入院前に自殺を思い立ったもの果たせず、遂に海への投身自殺を企んだ。

「今」がどうして俺の死ぬ時なんだらう、すると「今」死ななくともよいやうな気がして来るのだった。そこで買って来たウイスキー

を一本、やけに平げたが少しも酔が廻つて来ず、なんとなく滑稽な気がしだしてからからと笑つたが、赤い蟹が足許に這つて来るのを滅茶に踏み殺すと急にどつと瞼が熱くなつて来たのだった。⁽²⁾

何気なく近付く小さな蟹を相手に、憂さ晴らしでもしているような心地の自分を、愛想が尽きたかのように涙を流すのはともかく、「今」が死ぬ時でもあるまいという発想を、著者の北條自身はどのように意識していたのだろうか。死ぬつもりの決意の揺らぎを、ウイスキーをがぶ飲みしてごまかそうとしても酔えず、カラカラと笑いながら近寄る小さな蟹を踏み殺す、ではいささか大人げない。

一途に自死を願うのなら、「いま」も「あと」もなく、何時もが「いま」であってよい。「いま」か「あと」かのためらいや、死ぬための具体的な方法を選ぶのも、つまりは死に果てることからの逃避とも言える。北條の自殺願望は、「死にたい」思いが現実化する以前に、「生きよう」「もっとよく生きてみよう」という思いが芽生え、それが創作の発想となり著述になったのであるまい。

日記には、自殺の真似事をして自嘲する様を記したりしているが、ただそれだけのことで、実際に死に踏み切るような心積りもなかつたらしく、自殺の決意を固めたにしても、いざとなると逡巡したのが本当のところだろう。それでも「死ぬか」「生きるか」の心の惑いはしじょうちゅうだったのではないだろうか。

考へてみると、俺は今まで、自分の中にある死にたいといふ慾望と、生きたいといふ慾望とに挟まれて、もだえてばかりゐたのだ。⁽³⁾

(1) 「日記」1936年6月26日、27日（川端康成・川端香男里編『定本北條民雄全集 下巻』東京創元社、1980年、以下『全集下巻』）、237-239頁。

(2) 北條民雄『いのちの初夜』（川端康成・川端香男里編『定本北條民雄全集 上巻』東京創元社、1980年、以下『全集上巻』）、9頁。

(3) 「日記」1937年3月24日（『全集下巻』）、274頁。

そしてときには、

しかし〔原稿を書こうとして—引用者〕書けぬ。また例の憂愁が襲つて来る。心が暗鬱に閉ざされて、大声で慟哭したい。しかし泣いて見たとてはじまらぬと思ひ、自殺の方法その他を考へる。机の中から赤い絹紐を取り出して、ためしに首を締めてみる。縊つて締めるのはあまり呼吸にさしさはりがないが、頸に引つかけて引き上げるとわけなく呼吸がつまる。⁽⁴⁾

と、道化じみたこともしている。なおこの赤い絹紐は、友人に見せたりもしていたらしいから、実際に首を括る場面を暗示したかったのか、それとも死の準備は常にできていることを示したかったのであろうか。それはともかく北條は、「死にたい」のような思いに誘われると、前述の自著『いのちの初夜』の中の、「今死ななくてもよい」⁽⁵⁾という主人公尾田の思いが、実際には死を願う時の北條の心の中に、いつも蘇っていたような気がしてならない。

こうして「今が死に時ではない」と、「生きる」思いを煽ってみても、死の1年数カ月も前あたりともなると、細る命綱にすがる思いにもなったのではないだろうか。

今夜はよく眠りたいものだ。昨夜は午前二時過ぎまで疲れなかつた。床に就くと作のことが頭に浮び、興奮して脈搏が早くなり、どうしても眠れないほどなのに、昼間は萎んだ木の葉のやうに頭が重い。なんとか活気のある頭にならないものか。明日からもつと運動することにしようか。或は病気が騒いでゐるのかも知れない。これが健康者なら「切り抜ける」といふ言葉でこの場合に戦ひ得るが、我々にはさうはいかない。切り抜けるとは、一定の期間努力するなら再び平和に戻り得る場合

にいふのである。我々の場合に於ては切り抜けて行くのではなく、何故なら、かうした頭脳の不明瞭は死ぬまで続くであらうから、実にどこまでも堪へて行くだけである。意志と意力が欲しいと思ふが、その意志そのもの、意力そのものが、その内部から崩れて行くやうな気がする。これは怖しい、真に怖しい。ただ、いのちに頼るのみである。戦つて行くより仕方がない。それ以外どうしやうもないのだ。⁽⁶⁾

北條も人の子と改めて思うつぶやきである。ただこのような弱気と強気とが錯綜したような日記の記事はほかに見ない。それでも「生きる」強気な思いを崩そうとせず、次のように書く。

もつと懸命になれ。今の自分に一番欠けてゐるものは制作に対する熱意である。この灰白色に濁んだ世界で自己の個性を守るには余程の熱情と意力がなくてはならない。凡てに対し、情熱的たること。情熱をもつて個我を守れ。⁽⁷⁾

それはまさに「自己実現」であり「生きがい」である。これは北條の亡くなる1年半ほども前の日記だが、このあと「死にたい」と願う機会は著しく減ったか、あるいは弱まっている。

そうはあっても、北條の「生きよう」、「もっとよく生きよう」という心意気は、それに見合う体力が一方的に失われていく中での表れであり、「死んでしまいたい」思いを抑え続け、「死んでしまいたい」、否、「生きるのだ」「もっと強く」と自らを励ます日々でもあったろう。この落胆と奮起を数少ない友人の一人が、いみじくも言い得た論評をものしている。

「俺は死を思はない日は一日もない。」と、彼が言つたことがあつたが、一年に一度は周期

(4) 「日記」1937年3月26日（『全集下巻』）、275頁。

(5) 北條民雄『いのちの初夜』（『全集上巻』）、9頁。

(6) 「日記」1936年7月1日（『全集下巻』）、244頁。

(7) 「日記」1936年6月27日（『全集下巻』）、239頁。

のやうに其の暗い念ひが激しく高まつたやうに思はれる。「北條は死ぬ死ぬと云ひ出すと必ず一作書き上げる。」とは或る友の痛ましい冗談だつた。大抵の凡庸なものはどんな環境にも苦痛にも慣れて了ふのだが、北條は死ぬまでまぎらしやうのない不安と苦悩を抱いて終始した。それこそ何ものにもまさつて彼の作家としての刻印だつたと思ふ。「俺はどんな思想も世界観も信じはしない。たゞ俺の苦痛だけを信ずるのだ。」と、最後の年の年頭に彼は書いてゐる。彼をして死を希ひながらも、烈々とした気魄で書き続けしめたのは、ただ此の「苦痛だけを信ずる」峻厳な作家性だつたのだ。⁽⁸⁾

「死にたい」と願いながら「死ねない」だから「生きている」が、「ただ生きているだけで貴い」、貴いのは「書くことの個我を守る」、つまり個性的創作に励むとともに、死を願う自らを否定して闘い続けた。北條の臨終の言葉「おれは恢復する、おれは恢復する、断じて恢復する」⁽⁹⁾とは、死との闘いに賭けた思いの端的な表現だが、もともと死を願いそれが現実になるかもしれない一瞬に、その時が「今」なのかという潜在意識が常に働いていた。それは「生きる」、「書く」ことの運命についての無意識的な志向ではなかつたか。

北條の「蘇り」の死生観

北條の『いのちの初夜』に、次のような記述がある。

誰でも癱になつた刹那に、その人の人間は亡びるのです。死ぬのです。社会的人間として亡びるだけではありません。そんな浅はかな亡び方では決してないのです。廢兵ではなく、廢人なんです。けれど、尾田さん、僕等は不死鳥です。新しい思想、新しい眼を持つ時、全然癱者の生活を獲得する時、再び人間とし

て生き復るのでです。復活、さう復活です。ぴくぴくと生きてゐる生命が肉体を獲得するのです。新しい人間生活はそれから始まるのです。尾田さん、あなたは今死んでゐるのです。死んでゐますとも、あなたは人間ぢやあないんです。あなたの苦悩や絶望、それが何処から来るか、考へて見て下さい。一たび死んだ過去の人間を捜し求めてゐるからではないでせうか。⁽¹⁰⁾

ここには終生隔離の意味が極めて端的に表現されている。社会的存在としておちぶれるということではなく、社会的な生活ないし行動がすべて不能に陥るとする考えは、隔離による一般社会からの無期限の追放と孤立を、療養所という異質の場で強いられる苦悩から、あからさまに表されているが、癱は不治という無謀な認識のもとに、伝染予防を口実として「ここで死ねばよい」という、極悪の対策とは知らず運命と諦めていたろう。

そのような対社会的な孤独を噛みしめながら、北條は日記に次のように書いている。

唯一度兄が死んだ時、僕と父とで骨あげに行つた時、その骨を小さなつぼに入れながら、「昨日まで生きて居つたのに……のう。」と言つた。僕はこの言葉を忘れない。この言葉の最後が、どんなに深い父の感情に接続してゐたことか。父自身でなければ判らない。⁽¹¹⁾

父の思いが判らないといいつつも、自分も父の心のうちに抱かれたい気持を見て取れる。実母は北條が二歳の折に亡くなつており、実の兄弟は前述の兄だけだった。

いずれにしても、癱なるが故に社会における人間的存在としての立場を奪われ、縁者はおろか朋友の人間関係までも失う。それは癱を病んだ死者にまで及び、死後も納骨堂に隔離されたかのよう

(8) 光岡良二「北條民雄の人と生活」(『全集下巻』)、444-445頁。

(9) 東條耿一「臨終記」(『全集下巻』)、452頁。

(10) 北條民雄『いのちの初夜』(『全集上巻』)、39頁。

(11) 「日記」1934年12月8日(『全集下巻』)、172頁。

な状態に置かれた。呪術的な生きる魂の習慣化された思念を、北條はどのように受け止めていたかはわからないが、父の亡兄の生きたある時を偲ぶ一言に、「死んで生きる」信仰を重ねていたに違いない。「癪者は死者」、「死者の復活」を謳う『いのちの初夜』の題名（これは川端康成によるが……）にも、呪術的な信仰の一端がうかがえるよう思う。

もっとも、このような呪術的な信仰は「世間」のものであり、故郷での世間や他郷での世間の利害を超えていた（？）ような北條にとっての、「蘇り」の思想を云々するのはむつかしい。しかし死の一ヵ月も前に、亡兄の骨揚げの折の父の一言を思い出し（いつも心のうちに潜めていたのかもしれない）、

小林氏より書簡あり。かん詰発送の通知なり。変らぬ氏の厚情に深く感謝す。小林氏、川端先生等の親切な心を思ふ度に、自分は父を思ひ出す。そして氏等の半分の親切心を自分に持つてくれたらと、しみじみさせられる。所詮自分は肉身に捨てらるべく運命づけられてゐるのであらう。死んだ兄が懐しい。⁽¹²⁾

とあるのは、何か父に裏切られたような思いの怨み言だろう。

北條の死後、「遺骨は父が持ち帰り、郷家の墓域に建碑埋葬された」由である⁽¹³⁾。

北條の共感とその「やさしさ」

共感とは、相手の「苦しみ」や「悩み」などがわかり、相手がそれをどう考えているかを推し量って、ではどうしてあげたらよいか考える働き（思いやり）くらいにしておこう。そしてこの心の働きが表に出るのが「やさしさ」である。「死にたい」と「生きたい」との矛盾した心理的葛藤を常々抱え、死の願いを抑えて創作の構想にふける孤高の北條には、どこか近寄りにくい雰囲気も

あったかと思うが、「彼の本来の性情は明るい、人なつこい、或る意味で樂天的なものではなかつたか」ともいう⁽¹⁴⁾。しかし、全生病院での状況は次のようなものであった。

北條には友達が少なかつた。殊に文学に専心し出してからは、もう交友の範囲は五指に満たない位だつた。多くの人は彼の強いむき出しの我儘や孤高だけを見て、それが愛情への苦しいほど清潔な要求から出てゐることを知らなかつた。彼ほど愛情の飢ゑを知り、又愛情の虚偽を嫌つたものはなかつたと思ふ。彼が笑ふとどこか泣いたやうな顔になつた。彼の本当の人なつこさも、気難かしさとなつて表れた。⁽¹⁵⁾

親友の光岡良二は、このように振り返る。そして、次の日記の内容は、北條のこのような豊かな感性があればこそそのものであろう。

今まで振り返つて見ても、ほんとに苦しんでゐる人と交はる時にだけ自分は信頼された。例へばF子（従兄の妻）である。彼女等と同居してゐる時、初めの間彼女は、ルーズな、手に負へないひねくれ者でそのくせ人一倍図々しい—と言つて自分を猿のやうに嫌つた。けれど日が経ち、語り合ふことが多くなり、お互の苦痛を話し合ふやうになるにつれて、彼女は自分を信じ始めた。彼女にとつて、心の悲しみを語り得る者が、その夫ではなく、実に僕だつたといふことが理解されて來た。（これは決して自惚ではない。）彼女は、僕が自殺に出発した遺書を見ると、唯、わけもなく泣き出しまつた。そして彼女は、僕が癪であることを識らず、僕の病的な苦悩が理解出来なかつたらしいが、唯真に苦しんでゐる者として、僕の中に共通点を見出したのだらう。このことは幸か不幸か判らぬけれ

(12) 「日記」1937年11月9日（『全集下巻』）、289-290頁。

(13) 「北條民雄年譜」（『全集上巻』）、418頁。

(14) 光岡良二「北條民雄の人と生活」（『全集下巻』）、442頁。

(15) 同前、445-446頁。

ども、自分はうれしい。苦しむ人の友となることが出来る自分は、それは一つの幸福であろう。それから、先日僕が分析した看護婦の夢に就いても書かれてゐた。それによると、僕の分析は完全な図星だ。⁽¹⁶⁾

これは無意識な話し合いの中で内面的な苦悩をわかり合う共感であり、それがまた無意識な相互の思いやりに通じ、あるやさしさ（泣く）を表出している。

「生きる貴さ」を覚る

「生きる意味」をつくるのは自分自身であり、それは有形無形の「生きた酬い」に基づくが、北條が「生きる」か「死ぬ」かと思い惑いながら、小説を書くのが自分の宿命であって、書くのを止めてどう生きるか、その先については何も述べていない。

北條の日記を「死」の文字を拾うように、とりとめもなく読んでいると、「死ぬか生きるか」の境目をさ迷いながら、「死ぬに死ねない」といった思いがこの無言になる。

北條は、1932（昭和7）年すでに同人誌を刊行し、全生病院に入院した1934（昭和9）年頃には川端康成に私淑、その私宅の近辺をうろついたりしたという。癲の診断はある程度予感していたこともあって、それほど大きな衝撃を受けたようではないが、幾度か自殺を企図して結局は失敗しており、入院後は精神的にむしろ安定したようである⁽¹⁷⁾。入院三週間後、日記に以下のように書いている。

なほこの病院に於ける今までの生活態度はどうであったか？如何なる場合にも作家らしい観察的態度で暮して来た自分は、決して他人の嘲笑を買ふやうなことはあるまいと思

ふ。兎に角自分はこれから書くのだ。『文芸首都』は毎月買はう。これだけの苦しみを受け、これだけの人間的な悲しみを味はされながら、このまま一生を無意味に過されるものか！⁽¹⁸⁾

また、その三日後には、次のように書いている。

とまれ気分も落ちついた。これからほんたうの作家の生活を始めるのだ。作品すること、読むこと、観察すること、より多く苦しむこと。自己の完成へ。⁽¹⁹⁾

そして、さらにその翌日にも、次のように書いている。

激しく創作の慾望が心をゆする。昨日書いたものを今日書きなほす。いよいよ明日からあの作品の真髓に近づく。いよいよ心理はさびしくなりむづかしさはいよいよ迫る。だが書かねばならぬ。なんとしても書かねばならぬ。書くことだけが自分の生存の理由だ。⁽²⁰⁾

これが北條の自意識的な心理だったのなら、いかに死を願っても「土壇場での否定」になりかねない。

実際に亡くなる（1937年）一年半ほども前に、「死出の旅」に故郷徳島まで足を伸ばしている。

二週間の放浪から帰つて今日はもう四日目である。どんなに死なうとあせつてみても、まだ自分には死の影がささない。あの苦しい経験で判つたものは、実に、生きたい自分の意志だけであつた。轟音と共に迫つて来る列車に恐怖する時、紺碧の海の色に鋭い牙を感じる時、はつきり自分は自分の意識を見た。死

(16) 「日記」1935年6月11日（『全集下巻』）、194頁。

看護婦の夢の分析については、ある看護婦が癲を病む男の患者に恋をし、たとえ結婚を望んでも相手が癲なるが故にその望み（夢）を歪め、相手が病を重くするか死ぬかして夢を終わらせる、つまり男は好かれてより不幸になるという逆説的な分析である。

(17) 「北條民雄年譜」（『全集上巻』）、413頁。

(18) 「日記」1934年7月21日（『全集下巻』）、148頁。

(19) 「日記」1934年7月24日（『全集下巻』）、150頁。

(20) 「日記」1934年7月25日（『全集下巻』）、150頁。

にたいと思ふ心も、実は生きたい念願に他ならなかつた。そして自分は、あの時、「人間は、なんにも出来ない状態に置かれてさへも、ただ生きてゐるといふ事実だけで貴いものだ。」と激しく感じた。何故貴いか、ただ生きてゐるだけで、生の本能に引きずられてゐるだけで、どうして貴いのか？それは自分には判らない。が、実に貴いことだと感じた。どういふ風に貴いか。まだ言葉として表現することが出来ない。しかし真実貴いと思へたのだ。とにかく生きねばならぬと思ふ。⁽²¹⁾

北條はここではじめて、死にたいという思いと生きたいという思いとは裏表だと意識し、「生きたい、生きる」のは本能的であり、そこにある「貴さ」を感得している。ただそれは真実といいながらその意味を明かしていないが、死という限界状況での創作意欲に基づいていた、つまりまだ自分には書くことができる、死んでは何も残せないという閃きではなかつたか。その翌日に、次のように書いている。

もつと意志的になること。自分を高く見て下さる人々、殊に川端先生の期待に対して裏切つてはならない。もつと懸命になれ。今の自分に一番欠けてゐるものは制作に対する熱意である。この灰白色に濁んだ世界で自己の個性を守るには余程の熱情と意力がなくてはならない。凡てに対し、情熱的たること。情熱をもつて個我を守れ。⁽²²⁾

この決意が並々ならぬものだったのは確かで、以後亡くなる日までは日記から「死」に連なる文章が激減するが、その僅かな死に結びつく思いが表れている記述を追ってみよう。

ごろりと寝転んでゐると、[光岡良二が—引用者]「どうしたんだ。」「苦しいんだ。書け

ない。」「書けなきあ、書かなきやいいぢやないか。」と言ふ彼の顔を見ると、もうむつとしまふ。「とらはれるからいけないんだ。」と彼。「俺に空気のやうになれつて言ふのか。」文学だけが俺の生活ぢやないか。書くこととらはれないでどこに生活がある。生活と言つて悪ければ生と言はう。書くことが即ち俺の生なのだ。俺のつきつめた気持が判らんのか、と嘆鳴りたくなつて来る。なんにしてもノーマルな頭になれなかつた。奇妙にねぢれて腹立たしい。昼頃また机に向つたが駄目。たつた五十枚や六十枚の小説で、なんとしたことか！[中略]「療養所文芸も文壇のレベルに達し云々」の言葉は、なんといふ思ひ上りだ。もし真剣に人類といふものを考へ、現在の日本文学といふものを考へるなら、このやうな言葉は断じて吐けぬ筈だ。彼等は苦しんでゐる。それは判る。しかしさういふ苦しみ、癪の苦しみを楽しんで書き、何の疑ひもなく表現してゐる。それでいいのか。もし自己を現代人とし現代の小説を書きたいと欲するなら、その苦しみそのものに対して懷疑せねばならないではないか。癪の苦しみを書くといふことが、どれだけ社会にとつて必要なのか！といふことを考へねばならないではないか。彼等の眼には社会の姿が映らぬのであらうか。その社会から切り離された自己の姿が映らぬのであらうか。だが、こんなことは俺だけのことだ。彼等はみな楽しくやつてゐる。それでよろしい。ただ俺は誰とも会ひたくない。語りたくない。俺は孤独でもよい。絶えず社会の姿と人類の姿を眼に映してゐたい。俺は成長したいのだ。⁽²³⁾

それにしても腸結核による腹部不快感と痩せ、癪性結節性紅斑と神経痛には苦しみ抜いたことだろう。そのために病室のほうに移されているが、ここは「恐るべき世界なり。悪夢の如し。自殺が

(21) 「日記」1936年6月26日（『全集下巻』）、237頁。

(22) 「日記」1936年6月27日（『全集下巻』）、239頁。

(23) 「日記」1936年9月10日（『全集下巻』）、255-256頁。

ふと頭を掠める。周囲を見るに堪へず」⁽²⁴⁾ とあるものの自殺にはこだわってはいない。しかし病の苦痛は癒されるはずもなく、諸事の停滞する中で「死ぬか」「生きるか」ともだえ抜いたあげくに、

小説を書くのを止してしまひたい。しかし書くのを止せば、一体どうして毎日が過せるか。気が狂ふだけではないか。厭でも応でも小説を書く宿命を負はされてゐるのであらうか。⁽²⁵⁾

と本音のようなことも書いている。そして、死にとらわれそうになる。

昨夜は遂に一睡も出来なかつたので、今日は一日中ほんやりとしてゐた。原稿はまるではかららず、体は綿のやうに疲れてゐる。[中略]もう四月がそこまで來た。春といふものがあるのである。だが、ああなんといふ暗い春か。夜は死ぬことばかり考へる。色々と計画する。果して死ねるかどうか?⁽²⁶⁾

このように書いた翌日の夜、首吊りの真似をしてみる。

こうしているうちにも腸結核は漸次憎悪し、下痢、腹痛、倦怠感などに苦しみながら、「しみじみと思ふ。怖しい病気に憑かれしものかな、と。慟哭したし。泣き叫びたし。この心如何にせん。」⁽²⁷⁾ と嘆き、亡くなる1か月ほど前の5日間、毎食の献立や摂取量を克明に記し⁽²⁸⁾、その間、次のように自らを勇気づけている。

自殺は考へるな。川端先生の愛情だけでも生きる義務がある。治つたら潔よく独りで草津へ行くべし。なんとかなる。自意識のどうど

う廻りは何の役にも立たぬ。行動すべし。実行すべし。⁽²⁹⁾

日記を書く人は、死ぬ前になると意識的か無意識のかはともかく、毎日の食べ物や食べ方などを詳しく記す傾向があるように思える。「食べる、あるいは食べられる」のは、「生きる、より強く生きられる」ことの動物的な感覚によるのかもしれない。

それはそれとして、「自殺は考へるな」と自らを強く戒めたあと、翌々日には「久々の晴天にて気分良好。腹具合もかなり良い。一週間の努力の効か。今月一ぱい今の調子にて頑張るべし。さうすればきっと治る。」⁽³⁰⁾ と意気込んでいる。この僅か数日のうちの体調は、「幾分良し」⁽³¹⁾ と一度だけ思いついたように書かれているが、この末期的な腸結核の病状好転など望めるわけもなく、「食べると力が付く」といった心理的な効果であろう。

畏友東條耿一

東條耿一は1912（明治45）年生まれで、北條より2歳年長である。高等小学校卒、頭脳明晰。1927（昭和2）年に癪を発病し、神山復生病院に入院する。同院で受洗するが、翌年、軽快退院する。1933（昭和8）年に徴兵検査不合格（壮丁癪）となり、自殺未遂をへて、全生病院に入院する。1934（昭和9）年（北條入院の年）から文芸活動に取り組み、同時に不自由舎、精神病棟での付添いをつとめる。1936（昭和11）年、園内で結婚する。

個性の強い直情的な気性と虚無的な心情が、北條との交わりを深めた。それは、東條、北條の名字の近さからもうかがえる。

また東條は、北條の遺骨の一片を箱に収め、北條の日記とともに生涯傍らから離さなかったとい

(24) 「日記」1937年1月29日（『全集下巻』）、265頁。

(25) 「日記」1937年3月24日（『全集下巻』）、274頁。

(26) 「日記」1937年3月25日（『全集下巻』）、274-275頁。

(27) 「日記」1937年10月17日（『全集下巻』）、285-286頁。

(28) 「日記」1937年11月2日～6日（『全集下巻』）、286-289頁。

(29) 「日記」1937年11月5日（『全集下巻』）、288頁。

(30) 「日記」1937年11月7日（『全集下巻』）、289頁。

(31) 「日記」1937年11月4日（『全集下巻』）、288頁。

う。1942（昭和17）年死去、享年30歳。

これで東條と北條の仲は、いかに近く、いかに親しかったか、殊に互いに自分を隠さないでいたかよくわかる。

全生病院における北條は、病友との交流関係が至って乏しかったと前に述べたが、それは本来の豊かな感性と創作に賭けた意欲が、数多な交流への心配りを敢えて避けたようにも思える。そのために、数少ない「言わずもがな」の語り合いの不要な、暗黙のうちに心の通ずる友に限られていた。東條はまさにその一人だが、癲腫性病変によって失明が予想されたとき、その絶望からの解放は死以外にないと、ある日ひそかに北條に仄めかした。それについて北條は、日記に次のように書き留めている。

東條よ、今、僕は君に対して何とも言ふべき言葉がない。何故なら、どう考へて見ても、僕には、君の苦しみを解決する方法を死以外には見出せないからだ。僕は、唯一人の友、君に向つて、「死ね」といふ以外にない。これは何といふ悲しい言葉だらう。けれど、君を理解すればする程、さう言はざるを得ないのだ。この僕の気持は、あまりに理性的であり、リアリスティックであるかも知れない。けれど、あり来たりの、常識的な言葉で君を慰め得ないのは、僕の宿命だ。また、常識的な言葉で何等よろこびを発見し得ないのは君の宿命だ。たつた一人の、さうだ、この宇宙内のたつた一人の友、その友に向つて「死ね」と言はねばならぬ僕も、死以外に行き場のない君も、共に等しく「運命」なのだ。⁽³²⁾

また、両人は日記の交換をしていた。

東條の日記を聴かせて貰ふ。お互に日記を読み合ふやうになつたのは何時からか、僕は十分覚えてゐない。が、何時の間にかさうなつてしまつたのだ。⁽³³⁾

東條の自死のつぶやきを北條はどうのように受け止めていたのか。どうも北條は何も言わなかつたようで、五日後、盆踊りの広場に出掛けている。

お盆が来た。降るのかと思はれる程空は曇つてゐる。昨年の盆と同じやうに、やはり今年も涼しい。学園前のグラウンドには、大きなやぐらが建てられ、夜が来ると、みなめいめいに仮装などして踊りだ。八時頃出かけて行く。けれど踊りたいといふ心は湧いては来ない。望郷台に上ると、ほの暗い中に東條が佇んでゐる。大きな花の輪を鳥瞰するやうに、踊りはすぐ真下に見える。初めて自分がこの踊りを見た時は、土人の部落の踊りでも見るやうな感じがしたが、今年もやはりそのやうな気がする。東條と二人で降り、ぶらぶらと散歩をする。月は満月で碧い硝子玉のやうに中空に浮んでゐる。東條は突然僕に、自殺の決意を告白する。遂にここまで来てしまつたのか。僕は心の中に突き上つて来る激しいあるものと戦ひながら、それでも言ふべき言葉がない。彼が死を思ふことは既に久しい。そしてここに至ることは最早以前から予想されてゐることではないか。この彼に向つて自分は何と言つたらいいのだ。自殺をやめろと言ふか。ああ、だが今の僕はどうして彼の死を思ひとどまらせることが出来るのだ。それどころか、真に彼の苦しみを思ふなら、むしろ死を奨めるべきではあるまいか。人は何と言ふか僕は知らぬ。けれど僕にはさうより以外言ふ言葉がない。けれど、ああ、東條に向つて、この親友といふべきたつた一人の友に向つて、どうして死ねと言へるのだ。どうしても、どうしても僕には言へない。「僕には何とも言ふべき言葉がない。」僕はただそれだけを言つて置いた。これ程無慈悲な言葉はあるまい。死ね、と言ふよりも尚数倍冷たい言葉であらう。けれど、この冷たさが、この無慈悲さが、どんなに彼を思ふ僕の心か、誰か察して呉れ。僕自身何かの折に幾度も言つた

(32) 「日記」1935年7月9日（『全集下巻』）、215頁。

(33) 「日記」1935年7月5日（『全集下巻』）、209頁。

ではないか。盲目になつたら、いや、盲目になる前にきつと自殺する、と。この僕だ。この僕の考へを彼は今行はうとしてゐる。それは誰の姿でもない、僕自身の姿なのだ。彼は又言ふ。或る女性に結婚の申込みをしたと。その女は幾分かは文学に対して理解を持つてゐるらしい。言ふ迄もなく盲になつてから代筆して貰ふ為だ。その返事が今日は恐らくあるだらうと思ふ。その女の返事によつて死ななくてもよいかも知れぬと彼は言ふ。けれど90%駄目だらうと言ふ。つまり彼の生死はその女の返事一筋にかかつてゐるのだ。僕は言った。もしその返事がNoであつた場合はどうかその女と僕と会はせてくれと。僕は下手な口でその女を必死になつて口説いてみよう。しかし僕が女を口説くなんてなんだか変な感じがする。僕は生れて初めてだ。⁽³⁴⁾

「死ぬ」という一言から「死にたい思い」にまず共感し、東條の立場を思いやって自分の思いを重ね、ただ一言の声掛けに戸惑い悩む北條は、いじらしくすらある。東條が結婚を申入れたという相手の女性が、もし断つたら東條は死を選ぶに違いないと、では自分が口説いてみようと思い立つが、女を口説いた経験がないと思い直し、何だか変な感じになっているあたりも、思いやりが昂じたたわいの無さかもしれない。

北條の東條への思いやりと、東條の北條へのそれとでは同じようなものだろうが、はっきり言って東條はやはり大人である。

今日は朝からづきんづきんと頭が痛む。こんな日はせめて明るい隨筆でもと机に向つたが、もとより書けやう筈もない。今の自分の世界になんで明るいものなどあらう。明るいものを求めるだけでもきまりの悪い思ひである。文学も哲学も宗教も糞喰へだ。僕の体は腐つて行く。ただ一つ、俺は癩病が癒りたいのだ。それが許されぬなら、神よ、俺を殺せ。
[中略] 時間が経つて平常な気持に還れば、

またしても病氣の重苦しさがどつと我が身を包んでしまふ。小説を書く、有名になる、生き抜く、苦悶の生涯。——美しいことである、立派なことである。だがしかしふんふんと嘲笑したいのが今の自分の本心である。見るがよい、重病室の重症者達を！ あの人達が自分の先輩なのだ。やがて自分もあなり果てて行くのは定り切つてゐる事実なのだ。軽症、ふん、生が死を約束するやうに、軽症は重症を約束する。[中略]「気が狂ひさうなんだ。小説を書くなど、もう止めようと思ふ。」[東條は—引用者]「ふん、又か。それもよからう。それで一体どうするんだ。首をくくる自信があるのか。」私はもう黙つてしまふより致方がない。⁽³⁵⁾

東條は兄妹らも癩を病み、特に兄の病態には忌避感もあったらしいから、いずれは自分もと自殺を企図したものと失敗している。

追憶は時空を超えて —東條耿一「臨終記」—

日記は見舞にも来ない父へも繰り言を並べて終わる。以下は、小林茂（創元社）に宛てた半月ほど前の手紙である。

実は病状が少々悪化致し、ペンを持つことも全く不可能の状態にあつたものですから、御厚情深く感謝致しながら、遅れてしまひました。どうかお許し下さい。一時、かなり良好な経過で、この分なら間もなく元気になれるとして安心してをりましたところ、突然急性結節にて発熱、続いて猛烈な神経痛にやられ、そのためまた胃腸をすつかり悪化させてしまつたのです。現在ではおも湯と牛乳とをわづかにとれるのみにて、衰弱甚しく寝たきりの状態です。お送り下さいましたお品は目下枕許のけんどんの上に飾つてございます。全快したなら片端から平ぐべく、今から楽しみに致してをります。さきにお送り願ひました分も

(34) 「日記」1935年7月14日（『全集下巻』）、217-219頁。

(35) 「日記」1935年12月20日（『全集下巻』）、232-234頁。

未だ半分も残つてをりますのすつかりかんづめが豊富になり、たとへ今食べられなくともなんとなく痛快な気持で、全快の日を待つてをります。以上のやうな有様ですので、カルピスのやうなものでも呑んで見たいのですが、お暇な折がございましたら二本ばかりお送り下さい。尚カルピスのやうな軽い胃腸に触らぬ飲物はないものでせうか。あれば御面倒でも一緒にお願ひ申上ます。色々とほんとにお迷惑をおかけ申します。どうかお許し下さい。全快すればきつとこのお礼は作品で致します。⁽³⁶⁾

このように、病状のさらなる悪化を告げながらも、死はいささかも予測していなかったように思える。それは、「臨終記」における東條の次のような記述からもうかがえる。

来る日も来る日も重湯と牛乳を少量、それも飲んだり飲まなかつたりなので、体は日増に衰弱する一方であつた。食べる物とては他に何も無いのであつた。流動物以外の物を一寸でも食べようものなら、直ちに激しい痛みを覚え、下痢をするらしかつた。彼はよく、おれは今何もいらん。只麦飯が二杯づゝ食ひたい、そのやうになりたい、と云つた。⁽³⁷⁾

やがて幾許もなく死を覚ったのかもしれない。

死ぬ二三日前には、心もずっと平静になり私などの測り知れない高遠な世界に遊んでゐるやうに思はれた。おれは死など恐れはしない。もう準備は出来た。只おれが書かなければならぬものを残す事で心残りだ。だがそれも愚痴かも知れん、と云つたのもその頃である。底光りのする眼をじつと何者かに集中させ、げつそり落ちこんだ頬に小暗い影を宿して静かに仰臥してゐる彼の姿は、何かいたいたし

いものと、或る不思議な澄んだ力を私に感じさせた。私は時折り彼の顔を覗き込むやうにして、いま何を考へてゐる？ と訊ねると何も考へてゐない、と答へる。[中略] 静かな気持を壊されたくないのであらう。⁽³⁸⁾

実のところ私はこれまでに多くの人の臨終を看取ってきた。しかし、北條のこの臨死状態ともなると、すでに意識がないか混濁していた。北條のような症例は稀有といってよいではないか。こうして北條の死の前日に、東條は隣のベッドで寝て看取ることになった。このような形での付添いは、死の間近なことを病人に知らせるようなものである。

たいていの病人が、急に力を落したり、極度に厭な顔を見せたりするのであるが、彼は既に、自分の死を予期してゐたのか、目の色一つ動かさなかつた。その夜の二時頃（十二月五日の暁前）看護疲れに不覚にも眠つてしまつた私は、不図私を呼ぶ彼の声にびつくりして飛起きた。彼は痩せた両手に枕を高く差上げ、頻りに打返しては眺めてゐた。何だかひどく昂奮してゐるやうであつた。[中略] 彼は血色のいい顔をして、眼はきらきらと輝いてゐた。こんな晩は素晴らしい力が湧いて来る、何処からこんな力が出るのか分らない。手足がびんびん跳ね上る。君、原稿を書いて呉れ。と云ふのである。いつもの彼とは容子が違ふ。それが死の前の最後に燃え上つた生命の力であるとは私は気がつかなかつた。おれは恢復する、おれは恢復する、断じて恢復する。それが彼の最後の言葉であつた。私は周章てふためいて、友人達に急を告げる一方、医局への長い廊下を走り乍ら、何者とも知れぬものに対して激しい怒りを覚えバカ、バカ、死ぬんぢやない、死ぬんぢやない、と呴いてゐた。涙が無性に頬を伝つてゐた。⁽³⁹⁾

(36) 小林茂宛北條民雄書簡、1937年11月14日（『全集下巻』）、437-438頁。

(37) 東條耿一「臨終記」（『全集下巻』）、450頁。

(38) 同前、451頁。

(39) 同前、452頁。

次の部分は、最愛の友の死による東條の心理的混乱が、文章に反映されている。

彼の息の絶える一瞬まで、哀れな程、實に意識がはつきりしてゐた。一瞬の後死ぬとは思へないほどしつかりしてゐて、川端さんにはお世話になりっぱなしで誠に申訳ない、と云ひ、私には色々済まなかつた、有難う、と何度も礼を云ふので、私が何だそんな事、それより早く元気になれよ、といふと、うん、元気になりたい、と答へ、葛が喰ひたい、といふのであつた。白頭土を入れて葛をかいてやるとそれをうまさうに喰べ、私にも喰へ、と薦めるので、私も一緒になつて喰べた。思へばそれが彼との最後の会食であつた。珍らしく葛をきれいに喰つてしまふと、彼の意識は、急にまるで煙のやうに消え失せて行つた。⁽⁴⁰⁾

「おれは恢復する」という死の直前の生の雄叫びと、「親愛の盃を交わす」ような静かな和やかさが、同じ死の場面に重なっている。恐らく東條とともに駆け付けた当直医が、胸に聴診器を当て、瞳孔反射を見ながら静かに瞼をおさえ、臨終を告げたであろう。

もはや動かない瞼を静かに閉ぢ、最後の訣別を済ますと、急に突刺すやうな寒気が身に沁みた。彼の死顔は實に美しかつた。彼の冷たくなつた死顔を凝視めて、私は何か知らほつとしたものを感じた。その房々とした頭髪を撫で乍ら、小さく北條へと呟くと、清浄なものが胸元をぐつと突上げ、眼頭が次第に曇つて來た。⁽⁴¹⁾

東條の北條への静思の回想が重なったのだろう。

おわりに

本稿では、北條の日記を読みながら、希死願望は心の裏であつて、表は生きること、書くこと、自らの個性を貫き通すことではなかつたかと考え直し、また東條との交流がいかに密であったか、それは両者の感性の強い交わりとも知つて少し括めてみた。

私に文学的素養などないから、作家としての北條民雄を論ずることなどできないが、医学的ないしは心理学的に、限られた一面であればうかがえるかもしれない。しかし「受容」(『いのちの初夜』)のような発想は時空を超えており、どのみちむつかしいには違ひないが、「当たるも当たらぬも」の調子で日記の記事から考えてみた。

最も目につくのが「死ぬ」か「生きる」かの死生観だったが、「死ぬつもり」での旅路のどこかで、「生きることの貴さ」を覺り、「書く」こと、「個我を守る」ことに徹する誓を立てている。このように鬱的でいながら激しい気性では、親しい友人も二、三人と少ないが、共感性は決して低くなかったらしく、ある「やさしさ」をうかがわせる記事もある。

東條耿一との交流の深さは際立つてゐるが、それは東條の北條への「臨終記」に、死に際が全く異なる二つの場面で表現されている。死の苦しみを微塵も止めない美しい死顔に何かしらほつとしたものを感じ、生死の別のない髪の毛を撫でる感触の中に、「あの葛はうまかったな」という思いを込め、「共に生きた喜び」のうちに北條を蘇らしているのである。

北條もまた言う。「夜、東條と人生論。今更の如く彼の苦惱に驚き、しみじみ深い尊敬を覚える。私は良い友を持つた。しあはせ幸福である」⁽⁴²⁾と。癩を患つたからこそその言い知れぬ深い絆。

(40) 同前、452-453頁。

(41) 同前、453頁。

(42) 「日記」1937年8月13日 (『全集下巻』)、279頁。